嫌われキャロット

ヒロユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
嫌われキャロット

【Nコード】
N5636I

【作者名】
ヒロユキ

【あらすじ】
嫌われ者のロアは村はずれの畑に向かう。自分が嫌いなニンジンと思いを共有するために。そこへ彼を追ってきたのはユノン。夕暮れ迫るニンジン畑で二人に起こった出来事のお話。

僕の目にベール爺さんの粗末な古小屋が見えてくる。

町外れの森の手前、今にも崩れそうな茶色の土面の上、傾きかけの小屋だ。

湿気ているせいなのか、もともとの素材が悪いのか、屋根に貼り付けられた板は悉(ことごと)く、妙な具合に反っていた。安価な釘で固定された戸は中途半端に開いたままになっている。

あれでは、満足に雨も凌げそうも無い。風が吹けば飛ばされてしまうかもしれなかった。

町の材木置き場で捨てられた端材から作ったのだから、当然といえば当然なのだろう。

みすぼらしいけど、それがベール爺さんの家だ。

背の高い草を足で押しのけ、僕はけものみちをジグザグに進んでいた。

太陽は傾き、草たちが凪いだこの場所は見放された寂寥感に満たされている。踏んづけた地面が柔らかい。

今日は雨が降ったっけ。

逡巡して、なぜか、風の音が蘇った。次いで、校庭の隅のケヤキの木が思い浮かんだ。

ああ、そうか。

今朝は小雨が降っていたな。

僕は合点がいく。

学校の休み時間には僕は確かにそこにいて、ちょうど風が吹いて、葉の雫がぱらぱらと舞い散ったのだ。

それで、僕は雨が降ったのを知った。

でも、すぐに太陽が顔を出し、水分という水分を地上から抜き取っていった。校庭は走り回る子供たちですぐに砂埃が舞っていたのを思い出す。

「でも、ここは湿ってる」

僕はそれをわざわざ声に出して確かめて、また足を踏み出した。

目指すべき場所はすぐ近くだ。
小屋の脇を通り抜けて、その木立の向こう。小さな丘の野菜畑だった。
大した荷物は持ってきていない。身軽なほうが何かと楽だ。古くて傷だらけの水筒と、二つのりんご。これで少し遅くなっても、喉の乾きは癒せるし、空腹も満たせる。
それで充分だった。
野原を抜け、蜂がいるかもしれない木立は駆け抜けた。
すると、僕の前に耕された畑の並んだ畝が広がった。

爺さんの畑だった。誰の助けも借りず、確か、自分だけで作った畑だ。それほど広くもない土地だが、一人で生活する分には広すぎるほどの面積の畑だ。
聞いた話では、食べきれない野菜は隣町の商人に売りに行くらしい。爺さんはそれで得た金で、自分では作れない生活必需品を買うのだという。
僕はそこへ、許可を得るわけもなく、ずかずかと入り込んでいく。
もちろん、野菜を踏み倒すなんて心無いことはしない。畝と畝の間を細い板を渡るように進んでいく。

「あった。ここだ」

僕はつぶやいてようやく見つけた畑の一区画で腰を下ろした。さわさわと葉が服からはみ出した肌に触れ、地面に近くなったことで、独特のあの匂いが鼻を突く。
ニンジン畑の中に僕は座っていた。

正直に言ってしまうと、僕はニンジンが嫌いだ。このなんとも言えない匂いを体が受け付けないのを知っていたし、味も僕からしてみれば、不快な感覚を呼び起こした。
だが、子供が野菜を食べないというのはよくあることだ。
村の子供たちの中にも自分と同じようにニンジンが食べられない者たちは、それなりにいる。口に入れても吐き出し、生はもちろん、スープにしたって、摩り下ろしたって、嫌悪感は変わらない。
でも、それは大人になるに連れて改善されていくのが常だった。
それが、根気のある彼らの母親のおかげなのか、人間としての生来の順応なのか、僕は知らない。
大人になれば、自然とそれが嫌いなんて人間は村にはいなくなるのだ。
そのためか、ニンジンが嫌いなどと大人になっても公言することは、その人物がひどく劣っていて幼稚な子供のような、そんな軽蔑が人々の感情に生まれる。

「ガキみたいだな」

とあからさまに揶揄(やゆ)する者もいれば、

「へえ、変わってるね」

と物珍しそうな視線を向ける者もいる。
ちなみに、僕はもう二年もすれば成人だ。残酷なことに、ニンジン嫌いは治りそうも無い。

太陽が沈んできて、まるで顔をのぞきこんでくるかのように、座り込んだ背の高さで、僕と対峙した。
一種の優しさのような、溶けたぬくもりを肌が感じている。吐いた溜息を突き抜けて、紅い光は届いていた。
今日の出来事を僕は思い出している。
そばかすだらけの顔をした、チビのフリオが言った。

「役立たずだな。この木偶の坊が」

村祭りの大きな舞台を作っているときに、僕はその部品となる木材をふとした弾みで、地面に転がしてしまったのだった。
それを見た彼はここぞとばかりに、嬉しそうに、目くじらを立てた。

「坊ちゃんは家に帰って寝てな」

ふん、と鼻を鳴らし、そう言い捨てて彼は歩いていってしまった。
僕の靴には土が乗っかっていた。
彼が地面を蹴ったせいだ。
僕は一瞥して、それを手で払った。

「くそ、今に見てろよ」

彼の背中に睨みをきかせる。

「ロア、見ぃつけた」

明るい声がして、驚いた僕ははっと息を吸い込んだ。ぐっと体が硬直する。

突然、背中に体重がかかり、僕の体が意識せず、前屈する。頬にニンジンの葉が当たった。

「ユノン？」

僕は声の正体をすぐさま看破した。

「ねえ、こんなところで何してるの？」
「答えたくない、と言ったら？」
「そうだねえ……じゃあ、おじ様たちに言いつけちゃうよ。ロアがこんなところで油売ってるって。そうなるとロア、困るでしょ」

イタズラっぽく彼女は言う。

しかし、僕にはもちろん彼女が本気で言っているわけではないことを知っている。

祭りの準備をサボっているなどということが叔父にばれてしまえば、冗談では済まされない。

きっと三日間はろくに食事も与えられず、家中の掃除を嫌というほどさせられるに違いないのだ。実際に何度かその経験があるが、出来れば二度と味わいたくは無い。冬場は特に最悪だ。

まさかユノンが本気でそんなことを望んでいるとは到底思えないので、単なる冗談だろう。

「答えない」
「ええ、なんで？　本当に言っちゃうよ。言っちゃうんだからね」

脅すような彼女の声。

けれど、僕は冷静さを失わない。

「いや、ユノンは言わない」
「それはまた、どうして？」
「もし、ユノンが言いつけたら、ユノンだって祭りの衣装作りをサボってたことがばれる。そうなれば、そっちだって困るだろう？」
「知ってたんだ？　私もサボってること」
　背中越しに彼女が驚いたのが分かる。彼女の吐息がうなじをくすぐった。
「今朝、隣のハイナが言ってた。今日は皆で男物の衣装を作るから遅くなるんだって」
「そうか、ばれてたかぁ」
　少しも残念そうになく、彼女は言う。
「じゃあ、私達は仕事をサボった者同士だね？」
「サボった者同士？」
「そう、私とロアは仲間なの。どっちかがサボっていたことがばれて捕まれば、もう片方もばれて捕まっちゃう。一蓮托生ってやつだね」
　手を叩いて、彼女はどこか楽しそうだ。
　しかし、僕にとってはちっとも愉快じゃない。ばれて捕まるなんて、やはり冗談じゃないのだ。
「じゃあ、仲間なんだから話してくれてもいいよね」
　すると、急にユノンがそんなことを言い出す。

「何のことだよ？」
「ここに来た理由。仲間なんだから隠し事はなしだよ」
「仲間だから？　変な理屈だな」
「拒否権はないよ。さあ、観念して話しなさい」
後ろからそっと彼女に軽く首を絞められ、僕は揺すぶられた。それは中途半端な力だったが、重たい頭が成す術もなく上下する。
これはたまらないな。
笑いたくなって、面白くなって、僕は観念することにした。
素直に、
「嫌われ者のニンジンの気持ちを知りたかったんだ」
そう白状した。
横から僕の顔を覗きこんだユノンが瞳を瞬かせる。
「どういうこと？」
「そういう意味だよ。嫌われ者はどんな気持ちか、ここに来れば分かりあえるんじゃないかって思ってさ」
「嫌われ者？　ニンジンが？」
「それは僕が嫌ってるんだ」
「ロアも嫌われ者で、それでここに来たって？」
僕は返事をすることなく首肯で反応した。胸の内の黒い霧がどろりと広がってしまいそうな感覚を押し殺すように口を結ぶ。
「ロア、嫌われ者？」
「皆の態度を見ていれば分かるだろう？」
「そんなこと、ないと思うけど」

ユノンが気を遣っているのが分かる。微かに言いよどんだのだ。

「まあ、確かに全員が全員というわけじゃない。でも、大多数だ。特に前村長の親族やその派閥の連中は僕を目の敵にしてる」

「……それは」

「僕があの村長の愛人の子供だからだ。あれだけ権力を持ち、村人を束ね、信頼を集めていた村長だからな。そんな彼に愛人がいて、しかも、隠し子がいたなんて、その名声を汚す事実なんだろ？　だから、僕は忌避される」

ユノンが急に押し黙る。主にその事情を知っているのは大人たちや一部の子供だけだったが、ユノンもその一人だったらしい。間違いなく初耳の反応ではない。

「ニンジンは……」

「え？」

「ニンジンは何て言ってるの？」

「何だよ、それ」

「ニンジンと話しをしに来たんでしょう？」

まるで、当然のことのように彼女は言う。

「……俺の気持ちが分かったろ、って」

僕は指先でニンジンの葉を弄びながら、言う。

「お前に嫌われている俺は、いつもこんな気持ちなんだぞって。味や匂いが嫌いって言われても、そんなものはおいそれと変えられないんだ。簡単に、変えられるものじゃない。何か別のものとして生まれ変われるのなら、匂いも味も別な、違う食べ物として生まれ変

われるならそうしてやってもいいけれど……」

そこで僕は一度、言葉を切る。

「そうしたときに、お前はその世界にはいないんだろって。見返してやりたい、そのお前は違う世界で、羊肉の香草焼きでも食べてるんだろって」

言葉を紡げば紡ぐほど、闇の中を漂う魂の震えが体に伝わり、声まで震えて、身の内に潜むけだものが外へ這い出そうともがいているような、そんな恐怖感が僕を包んだ。憎むべき悪魔は外ではなく、自分の内にいて、逃げることの出来ない絶望と孤独が交互に僕を食いつくために生臭い息を吐き散らしているようだ。

「……そうなんだ」

自分の戯言に妙に納得したように、ユノンは言う。

「ニンジンって、意外とおしゃべりな植物なんだね」

そんなことを真面目腐って言うので、僕は苦笑してしまう。背中に感じる体温を手がかりに、僕は右手を後ろに伸ばし、地べたについている彼女の手のひらを上からそっと握った。彼女は嫌がらなかった。柔らかな感触が、心を落ち着けてくれる。

「私が食べている最中は全然しゃべらないよ」
「そうか、変だな」
「きっとたまたま無口な人だったんだね」

彼女がニンジンを人と言ってしまうところがまた面白いが、僕は

指摘しなかった。

「しかし、なんにせよ。そうなると、この世界でニンジンはニンジンのまま居るしかないんだな」

そう呟いて、僕は頬に雫が伝うのを感じる。堪えていたわけではないので、それはためらうことなくこぼれ落ちて、服の上で弾けた。それは夕陽色に輝いたかと思うと、すぐにじわりと滲み、布のしみとなった。

「ウサギさんだ」

しばらくして、ユノンがいきなり意味不明なことを言うので、僕は、

「何だよ、それは」

とめんどくさくなりながら訊いた。

「ウサギの好物って知ってる？」

「雑草か？」

僕は適当に答える。

「ニンジン、好きだよ」

「……ニンジン？」

「絵本にね、描いてあるよ。昔に読んだ本。怖ーい魔女が出てくる本」

「魔女ねぇ」

「本当だよ。人間をウサギに変えちゃうんだから」
「何の意味があって人間をウサギにするんだろうな。僕だったらこうもりとか、カエルとか、やもりとか、そういう気色悪いものにするけれど」
　そういったものの方が、魔女の恐ろしさを引き立てるというものだ。しかし、人間をウサギに変えてしまうということは、魔女は食べるつもりなのか。
　ユノンは口出しするな、と声を少し高くした。
「なんでも良いでしょう、そんなもの。問題は魔女が思い通りの魔法を使えるってことだよ」
「それで？」
「魔女はそのウサギにまた魔法をかけます。いろんな魔法を彼女は知っているのです。そして、それはニンジンしか食べられなくなる魔法でした」

　これはまた、中途半端な嫌がらせだ。

「ニンジンが好きでも嫌いでも、問答無用、それしか食べられなくなるんだよ。これは大変だよ」
「確かに大変だよな。僕は絶対そんな魔女には捕まりたくないな」
　僕は魔女の魔法でウサギに変えられた人間たちを想像した。誰も居ないベールじいさんの畑で、跳ね回りながら、地面から顔を出したニンジンを齧る彼ら。それを遠巻きに見ているウサギ、それは僕だ。
　きっとそのうち、空腹で腹がなり始めるのだろう。
「でしょう？　怖いでしょう？」

どこまで本気で言っているのか、ユノンが言葉に合わせて体を揺する。背中合わせの僕にはその度にごんごんと彼女の頭が首元に当たった。
「作り話はそれで終わりか？」
「私が作ったわけじゃないよ。著名な童話作家なの」
「へえ……」
「……ねえ、それが実話だったら、どうする？」
急にユノンはぼそりと言う。そこにおふざけの気配がないことに僕は気がついた。どういうつもりなのか、彼女は立ち上がる。
僕は急に背もたれを無くして、無様に背後に仰向けに倒れこんだ。砂埃が立ち、わさわさとしたニンジンの葉が上から覆いかぶさってくる。あの独特のにおいを鼻から吸い込んだ。
「いきなり、何だよ」
僕は目の前に仁王立ちしたユノンを見上げた。今日初めて顔を目にした彼女の頬には足のある宝石がその上を歩いたかのように、光り輝く筋があった。
背中越しでは分からなかったが、彼女も、泣いていたのだ。
可憐な細い髪の影から覗く二つの瞳は湖の底の深い緑を湛えているようだ。引き込まれそうな無限を感じる。
僕は、なぜだか、また涙が出そうだった。
「私、魔法をかけられたウサギなんだ」
彼女がそう告白した。

「何の話だ？」
「だから、言葉のままだよ。私は、ウサギ」
「人間だろ？」

僕の言葉に彼女は返事をしない。代わりに膝を地面につくと、僕の上に覆いかぶさってきた。僕の頭の横に両手を着き、顔を一定の距離で保ったまま、静止する。

するると、僕と彼女とのその短い空間が、他の何者をも除外したかのように、虚空の彼方へ引き去ってしまったかのようだった。僅かな風のささやきも聞こえなくなっている気がする。

彼女の顔を、こんなに間近で見たのは初めてだった。

それは何か言葉で形容する必要がないほど、綺麗だった。

僕の手が無意識に彼女の頬に伸び、涙の跡をそっと拭った。ぬくもりの残滓が指先に伝わり、たちまち、命を失うように冷たくなる。

「ウサギ、なの」

まるで、魔法にかかっているように、彼女は繰り返す。

「嫌われ者のニンジンでも、意味もなく、好きなの……」
「こんな僕でも、か？」

すると、急に彼女は微笑んだ。

「ふふふ、ロアの顔、夕陽に照らされてニンジンみたいね」

僕はそう言われて、動揺し頬に赤みが差したのを自分で感じた。

「それは、絶対に褒め言葉じゃない」

「そうよ。褒めているわけじゃないもの、見たままを言っているだけ」

彼女はけらけらと笑う。けれど、僕はちっとも面白くない。

「笑うなよ」
「じゃあ、笑わない」

彼女の表情が再び沈黙を貼り付ける。

「何も言わないのか？」
「何か、言えばいいの？」
「何か、気の利いたことだ」
「気の利いたことって、どういうこと？」
「さあな、気の利いたことは気の利いたことだろ。言ってくれなきゃ、判断できない」
「自分は何も言うつもりないんだ。人任せなんだ」
「人任せで悪いのか？」
「たまには、それもいいのかもね」
「たまには？」
「ほんの些細なことだし。本当に悪いことなら、もうしてるし。お互い様だしね」
「そうだな、祭りの準備をサボってるしな」
「……なんだか、変」
「何がだよ」
「おしゃべりするなら、こんなに近くなくても出来るもの」
「ふふふ、そうだな。普段、こんなに顔を近づけて話しをしている奴らがいたら、変だよな」
「こういう時にすることは、おしゃべりなんかじゃないよね」

彼女はそう囁くように秘めやかに言って、そっと近寄った。
あの、嫌いなニンジンの匂いもどこかに消え去っていくようだった。

数秒間の静寂の後、僕とユノンは立ち上がった。もう少しそのままでもよかったが、意外にもあっさりと彼女が身を起こしたので、僕もそれに習ったのだ。服についた砂埃を払う。
そして、僕はふと思いついて、傍らに置いていた二つのりんごの片方を彼女に手渡した。

「食べなよ」
「いいの？」
「きっとおいしいよ」
「ありがとう」

彼女はとてもうれしそうに微笑むと、服で赤い皮を擦った後、ためらいもなく、齧った。
ぱっと花咲くようにりんごの香が漂う。
それを見て、僕はしてやったりと大笑いをした。
きょとんとした彼女は、何がおかしいのか分からず、りんごを片手に目を瞬かせた。

「な、何？」
「ウサギじゃねえのかよ」
「え？」
「ニンジンしか食べないんじゃなかったのか？」
そう指摘すると、彼女はいろいろと僕に投げつけてやりたい言葉があるようで、幾度か口をしばしぱくぱくと動かしたが、ほどなく

恥ずかしそうに俯いた。

「……意地悪」

「これって意地悪なのか？」

「意地悪だよ、ロアは意地悪なの。こんな時にそんなこと言うの？」

「それは悪かったな。なら、りんご、食べないのか？」

笑みを堪えながら、僕が訊く。

「食べるよ。おいしいもん」

彼女はまるで、仕返しをするかのようにためらうことなくりんごを齧り始めた。僕もそれを見ながら、りんごを食べることにした。ニンジン畑で食べるそれはまた、格別においしかったような気がしたのは、きっと気のせいではないと思った。

夕陽が逃げるように消えた後は、大地に残っている太陽の熱はすぐに立ち消えて、冷たさと静けさが駆け足で忍び寄ってきていた。

僕と彼女は、畑の畝と畝の間を、ウサギのように飛びながら、野菜を踏まないように歩く。

僕は、ふらつかないようにステップを踏む冷静さと、ジャンプをするときのスリルを求める好奇心が交わって、不思議な気持ちになった。

楽しいのならこれでいいか。

心なしか、ここに来たときよりも、足取りが軽くなった気がした。

星降りが始まる前に家に帰らなくてはいけない。帰り道を歩く僕らのスピードは知らず、速くなった。でも、僕はつないでいた手が離れてしまわぬように、何度も握りなおした。

それは彼女の存在を確かめる作業で、消えないことを手を組んで

祈ることと同じような意味を持っていた。

「一緒に行こう」

別れ際に、彼女が言った。

「ああ、一人ではどこかに行かない」
「それで、いいと思うよ」

それだけ言って、彼女はきびすを返した。
彼女の後ろ姿を見送る僕は新たな希望を確かに感じている。
それは毛布のような温かさで、僕をぼうっとさせた。

嫌われニンジンでも、未来を歩いていける。
あの、苦手な味と、匂いが、今は愛しいものに思えるのは、きっと嘘じゃない。
そう思って、僕は服についていた何かの動物の毛を払い落とした。

家への帰り道はオレンジ色の光で満たされている。

（後書き）

作者のヒロユキです。
この作品は、たまには短編でも書いてみようかと、以前に書きかけていたものを掘り返してきたものです。基本的に僕は短編というやつが苦手で滅多に書くことはないのですが、今回はぽっと湧いたアイデアをそのまま引き伸ばしたりせず、そのまま書いてみました。
少しでもお楽しみいただけたならば幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5636i/

嫌われキャロット

2010年10月10日07時15分発行